様式 C-19

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成　23　年　6　月　30　日現在

機関番号：３４３２０
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008　～　2010
課題番号：　２０５２００６１
研究課題名（和文）　南インドにおけるブラーマン文化の現在：　ケーララ州ブラーマン宗家の事例研究を中心に
研究課題名（英文）　The Contemporary Brahmin Culture in South India: A Field Research on Some Leading Families in the Brahmin Society in Kerala

研究代表者
手嶋　英貴（TESHIMA　HIDEKI）
京都文教大学・人間学部・准教授
研究者番号　：　３０３８８１７８

研究成果の概要（和文）：
(1)ネドゥムピリ・タラナネルール家が所蔵する十一の写本（ヴェーダ祭式補助文献「チャダンガ」、ヒンドゥー王権儀礼儀軌など）を撮影した。(2) ヴァードゥーラ派の宗家であるタラナネルール家の歴史と現状を詳しく調査し、その過程で「タントリ」と呼ばれるヒンドゥー寺院の首席司祭に関する情報を収集した。(3) 現代におけるヴェーダ祭式挙行の実態を調査した。

研究成果の概要（英文）：
(1) 11 manuscripts (mainly those of *Caṭaṅṅa*s, manuals for vedic ritual performance, and one of the manuals for a Hindu kingship ritual) belonging to Neṭumpilli Taraṇanellūr family are photographed. (2) History of Taraṇanellūr families, the leading families of Vādhūlaka (one of the vedic schools) is researched; and social position of the *Tantri*s (the chief priests of Hindu ritual) is researched. (3) Present style of the vedic ritual performance in Kerala is researched.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| ２００８年度 | 1,700,000 | 510,000 | 2,210,000 |
| ２００９年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| ２０１０年度 | 600,000 | 170,000 | 780,000 |
| 総　計 | 3,300,000 | 980,000 | 4,290,000 |

研究分野：インド宗教史
科研費の分科・細目：哲学・宗教学
キーワード：(1)現代インド，(2)ヴェーダ，(3)写本，(4)ヒンドゥー，(5)ナンブーディリ，(6)タントリ，(7)バウダーヤナ，(8)ヴァードゥーラ

## １．研究開始当初の背景

(1) ヴェーダは､その成立から 2000 年以上もの間、バラモン階級の継承者であるブラーマン集団において、口頭伝承と写本資料により伝えられてきた。しかし二十世紀後半以降、インド社会が近代化していく中で、それらの貴重な伝承も次々に消滅している。近年ではまとまった口頭伝承はほとんど途絶し、パームリーフ等に手書きされた写本類が、南インド・ケーララ州に住む一部のブラーマン（ナンブーディリ）の家系に細々と継承されている状況にある。これら写本資料も、年代の古い貴重なものほど劣化が進んでおり、その伝承内容を確認することが困難になりつつある。また、こうした現状を受け、日本を含む各国のインド研究者が現存するヴェーダ伝承の確認に努めてきた。こうした現存ヴェーダ文献の調査は、世界的視野においても貴重なインドの文化的遺産を次代に伝える事業

として、今後も継続することが望まれる。

(2) また、従来の調査では看過される傾向にあった非ヴェーダ系の伝承を発掘することも課題であろう。つまり、これまで主な調査対象となってきたヴェーダ祭式文献のほか、それに対する現地語（マラヤーラム語）の補助文献「チャダンガ」、およびヒンドゥー儀礼関連の写本類に目をむける必要がある。そこには、聖典語ではなく世俗語で書かれた文献においてこそ伝えられるローカルな情報——写本を伝持するブラーマン家系や周辺地域の歴史など——も少なからず含まれていると予想される。これらの資料は、古代文化の解明を主とする視点からは副次的な位置に置かれるが、近現代におけるブラーマン文化のあり方を理解するためには一級の資料になりうるはずである。

(3) 他方、従来の研究では、ヴェーダ伝承の保持がどのようになされているのか、また伝承を保持する人々が現代インド社会の一員としていかなる立場にあるのか、といったことが十分に検討されてこなかった。この点について調査を進めることにより、南インドにおけるブラーマン文化の特質と存在意義とを、歴史的・文化的視点からだけでなく、現代的・社会的な視点からも捉えることが可能になるだろう。

## ２．研究の目的

本研究の目標は、ケーララ州のヴェーダ伝承者である「ブラーマン」の文化という具体的な素材に的を絞り、現代インドの理解に繋がる事例調査を遂行することにある。そこでは、パームリーフに書かれたヴェーダ写本のみならず、人々が保持している口頭伝承をも調査対象とする。これにより、ブラーマン文化の全体像を解明することを試みる。また、ブラーマンたちの保持するヴェーダ伝承が、現在のインド社会においてどのような存在意義を持つかという点についても、周辺地域における聞き取り調査等を通じて明らかにしていく。

その意味で、本研究は、貴重な文化遺産の保存・精査にとどまらず、経済躍進の著しい現代インドが内包する諸問題の本質に関する着実な理解に向けて、具体的知見を提供しようとするものである。ここで得られる成果は、インドを対象とする政治学、社会学、人類学といった様々な分野の成果と相補的な関係を持ちうるものであり、広範な学術的連携の基となることが期待できる。

## ３．研究の方法

(1) ケーララ州・イリンニャーラクダ市のブラーマン宗家であるネドゥムピリ・タラナネルール家が所蔵するヴェーダ関連資料など様々な写本類の画像を収集し、その内容調査を行う。

(2) 同家に属するブラーマンのメンバー、および周辺地域の人々に対する聞き取り調査を行う。特に、前者においては「現代インド人」としての生活実態と伝承保持の将来的問題、後者についてはブラーマン集団の存在とその伝承文化に対する認識を調査する。

(3) ケーララ州とその近隣州に散在する他のブラーマン家系の現状に関する情報収集を行い、イリンニャーラクダ市の事例を南インド地域全体において位置づける。

## ４．研究成果

(1) 主な研究成果

① 写本調査に関わる成果

本研究課題における現地調査では、ヤジュルヴェーダ所属のヴァードゥーラ派宗家であるネドゥムピリ・タラナネルール家が所蔵する十一の写本（下掲）を撮影した。目下、画像整理を行いつつ、各写本の内容分析に着手している。

本調査で収集されたものには、シュラウタスートラ、グリヒヤスートラなど従来貴重視されてきたヴェーダ祭式文献が含まれるとともに、一方で所蔵家系や現地社会の近現代史を窺うことのできる公文書類、さらに同家系と密接な関係のあったトラヴァンコール王家の儀礼を記述するヒンドゥー教文献が含まれていた。それらのうち、一つはかつてトラヴァンコール藩王家と深い結びつきのあった同家に伝わるヒンドゥー王権儀礼（バドラディーパ・ヤーガ）の儀軌であり、もう一つは近世において同家で作成された手紙類の控えを集めたものであった。これらは、ブラーマンの人々が単にヴェーダ伝承者としてだけでなく、王権や地域民衆とも深くかかわる存在として、社会的なプレゼンスを持ってきたことを窺う貴重な資料と言える。

一方、近現代のブラーマンたちがヴェーダ祭式の執行に際し直接依拠しているものとして、「チャダンガ」と呼ばれる文献群がある。これらは、サンスクリット語による古代文献の陰に隠れ、これまで着目されることのなかったものである。しかし、現地で行われている「生きたヴェーダ祭式」を研究する際には最重要の資料だと言える。ヴァードゥーラ派のチャダンガについては、これまで現地のブラーマンが使用する祭式マニュアルとして編纂・出版されたものはあるが、学術的な批評校訂を経た刊本は存在しない。本調査では、今後発展していくべきチャダンガ研究の基礎資料組成を視野に入れ、特に優先度の高いシュラウタ祭式関連のチャダンガ写本を収集した。

② タラナネルール家の歴史と現在

タラナネルール家は、ケーララ州のヴァードゥーラ派における宗匠格の家系である。それと同時に、ケーララ、タミルナドゥの両州にわたる多くのヒンドゥー寺院において、「タントリ」と呼ばれる主席司祭を担う家柄でもある。それゆえ、タラナネルール家の歴史を知ることは、ヴェーダ伝承史の一部を確認するとともに、ヴェーダ伝承者たちとヒンドゥー寺院、およびヒンドゥー儀礼との接点について重要な情報を得ることに繋がる。

今回の調査では、主にネドゥムピリ・タラナネルール家のメンバーに繰り返しインタビューを行った。現段階で聞きとった内容を整理すれば、という但し書きは付されるが、タラナネルール家の大まかな歴史として、以下の知見を得ることができた。

同家は現在、1. キタンガッシェリ、2.ネドゥムピリ、3.テッキニヤットゥ、4.ヴェルテーダットゥ、そして 5.チェンバーピリという五つの家に分岐しているが、元々一つの家であった。遠い以前（およそ 700 年前か）、まずキタンガッシェリ、ネドゥムピリ、そしてテッキニヤットゥというに三家に分岐した。現在タラナネルールという家名の前に付される「ネドゥムピリ」や「テッキニヤットゥ」といった名は、タラナネルール家のメンバーが移住した地にかつて居住し、その後断絶した家の名であるという（「キタンガッシェリ」もそうであるかは不明）。その後、テッキニヤットゥ家からヴェルテーダットゥ家が分家した。また近代には、同じくテッキニヤットゥ家からチェンバーピリ家という家が分岐して、現在に至っている。

ヴァードゥーラ派では、かつてコーヴァートとポーナルールという二つの家が宗匠（オーイカン）の権利を持っていた。しかし、約 450 年前にコーヴァートが断絶した際、同家の宗匠格と、それに付随する聖典写本（グランタ）が、キタンガッシェリおよびネドゥムピリというタラナネルールの二家に譲渡された。一方の宗匠家であったポーナルールも 65 年ほど前に断絶しており、同家に所有されていた聖典写本もキタンガッシェリ、ネドゥムピリの両家に委譲された。こうした経緯から、ヴァードゥーラ派の貴重な聖典写本が現在は両家において保管されることとなった。

以上の話は、今回の聞き取り調査によって初めて明らかになったことであり、ヴァードゥーラ派ヴェーダ写本の伝承史を探る重要情報である。ちなみに、この情報は、現在のタラナネルール諸家が、ヴェーダの宗匠格を持ちながら実際のヴェーダ伝承をほとんど保持していない事実とも一致するようにみえる。つまり、元から宗匠の家柄だったわけではなく、他家の断絶という不測の事情から宗匠格と聖典写本を譲り受けたため、人的営為によって維持されるヴェーダ伝承は、タラナネルールの家系に伝わっていなかった可能性があるといえる。

しかし他方で、タラナネルール家はヒンドゥー寺院の首席司祭「タントリ」の名門として知られる。「タントリ」は、サンスクリット語 「タントリン」（tantrin-） に由来し、「タントラ（祭事）を司る者」といった意味で捉えられる。タントリは、一つの寺院にだけに関わるではなく、複数の寺院を管轄し、主要祭事が行われる時には、指導者的立場でそれに参画する。他方、寺院における日常の祭事はプージャーリーと呼ばれる寺院付き祭官（日本の仏教寺院における「役僧」の立場に近い）が行う。ケーララにおけるタントリの家系としては、ここに述べる タラナネルール家 と、アイヤッパン神の聖地・シャバリマラの寺院を所轄する タラマン家がとりわけ有名である。

タラナネルール家は、家系が分化する以前より、トラヴァンコール藩王家付きのタントリとして高い地位を認められてきた。王権儀礼の執行を司ることから、「王の師」（ラージャグル）と呼ばれる存在であった。このように、ヒンドゥー儀礼の世界で高い権威を持っていたことが、断絶した家の宗匠格と聖典写本をタラナネルールの二家が占有しえた理由の一つであったかもしれない。

なお、王室付きタントリの役割は、現在ではネドゥムピリ家が継承している。そのため現在でも、ティルヴァナンダプラム（トリヴァンドラム）のパドマナーバスワーミ寺院など旧王家に関わる寺院のタントリ職を担う。また、ケーララ全域に約 270 の所管寺院があり、各寺院の主要祭事には家のメンバーが行き、指導的役割を果たす。

ネドゥムピリ家は、戦後の土地改革まで、50,000 ヘクタールの領地をケーララ州全域およびタミルナドゥ州南部に持つ大地主だった（現在の所有地は約 2 ヘクタール）。現在も膨大な数の土地管理文書が保管されている。現在の家の建物は、1860 年にトラヴァンコール王のアヤールヤン・トゥルナールが寄進したもの。前者の建物は新築、後者は以前あった小規模な建物の改築・増築。今の離れの前にある広い空き地には、かつて 200 人のスタッフが働く、土地・寺院管理業務などを行う事務棟があったという。

しかし 1957 年に、インド憲法に基づく土地改革（Land Reform）が実施行され、ネドゥムピリ家はほとんどの領地を失った。ケーララ州の土地保有上限設定はインド全土で最も厳しい「15〜37.5 エーカー」というものであった。これにより、ヴェーダ伝承者は地主の地位を失い、以前より貧しくなる家が多く生まれた。また、社会主義の勢力が強いケーララ州では、戦後に寺院の多くが公有化さ

れ、または荒廃して無人になる例が多かった。そのためタントリたちは、かつての所轄寺院での司祭職務を失い、ネドゥムピリ家も含め、宗教家系として衰退する過程にあった。

しかし 1990 年代からインドが経済開放政策をとり、国民の所得水準が上がるにつれて、寺院に対する喜捨が増えてきた。それにより、タントリが寺院儀礼に出仕する機会も増えているという。タラナネルール諸家のように多くの寺院を所轄する有力タントリ家系は、過去の栄華に遠く及ばないながら、一時期の貧しさからは脱しつつあると思われる。

以上に記述したタラナネルール家の歴史を調査していく過程では、ケーララのブラーマン社会を理解するために重要な新知見が得られた。ヴァードゥーラ派のヴェーダ伝承が様々な曲折を経て現在に見る形で伝承されるに至ったという調査結果は、他のヴェーダ諸派においても同じように複雑な伝承史があったことを予見させるものである。また、ヴェーダ伝承者であるブラーマンの一部に、タントリというヒンドゥー寺院と深く関わる立場の家々があり、またそこには地域の政治的支配者層とのつながりも明らかになってきた。このように、特定の家系に取材した調査でありながら、本課題の成果は南インドのブラーマン文化を多面から考察するための手がかりを複数もたらすものとなった。

③ 現代におけるヴェーダ祭式挙行の実態

今課題の調査では、ヤジュルヴェーダ所属のバウダーヤナ派における宗匠家（ヴァイディカン）の一つであるカイムック家を繰り返し取材した。同家では、ヴェーダの日常シュラウタ祭式であるアグニホートラ、および新月祭・満月祭が挙行されている。こうした、現代における日常シュラウタ祭式の実態は、これまで学術調査の対象となることがほとんどなかった。

その一因には、前項で述べたとおり、戦後の土地改革でヴェーダ伝承者の人々が経済的に没落したことがあろう。ヴェーダ日常祭式の挙行には、多大の時間と労力を要する。かつてのヴェーダ伝承者は一種の「有閑階級」であり、ヴェーダ祭式の挙行も可能であった。しかし戦後、何らかの仕事に従事する人が増え、結果として日常祭式を挙行する家が急激に減ってしまった。そのため、研究者がそれらの挙行を取材するきかっけを得ることが難しくなった面があると思われる。

しかし近年、一度途絶えたヴェーダの日常祭式を、再開することがしばしば行われている。前項に言及した、インド国民の生活水準向上の延長線上に、こうしたヴェーダ祭式復興という動きもあると考えられる。今回の現地調査では、そうした視点から、カイムック家の事例を調査することとした。

同家のヴェーダ祭式は、戦後になって一度途絶えていた。しかし現家長のラーマン・ソーマヤージパートゥ氏（1954 年生）が自らチャダンガを読み、またシュカプラムなど他村の古老から祭式を学んで、14 年前（1996 年頃）にアグニホートラを再開した。2006 年にソーマ祭を行ってからは、新月祭・満月祭も行っている。なお、現家長の祖父もソーマ祭を行ったという。

こうした現代に行われるヴェーダ祭式のヴィデオ映像は、古典文献に記される祭式記述の理解に資する場合が多々ある。また、目下写本画像の収集を進めている「チャダンガ」の内容を理解するためにも、それを具体化した祭式現場の様子や祭官の所作を記録することには大きな意味がある。こうした考えから、今課題の現地調査では、カイムック家の新月祭と満月祭、およびアグニホートラをヴィデオ撮影した。これらの日常シュラウタ祭式を記録した映像資料は学界未知のものであり、本課題の成果は貴重である。

これらの調査を通じて、バウダーヤナ派内でのヴェーダ祭式の現存状況、および近年における祭式復興の動きなどについて、今後詳しい調査を行うための足がかりを築くことが出来た。

(2) 成果の位置づけ

本課題の特色は、何よりケーララ州のブラーマン宗家という調査対象から、ヴェーダ伝承とヒンドゥー教の接点を示す具体的な事例を紹介する点にある。また、その接点にあたる「タントリ」自体、従来の学術研究においては一度も本格的に調査されてこなかったものである。それについて詳しい情報を集め、整理することで、本課題の作業はヴェーダ文献学のみならず、南インドの社会・文化を対象とする諸研究分野においても参考となる成果を導きつつあると考えている。

(3) 今後の展望

上記に述べた「タントリ」に関する継続的調査のほか、以下の二つを今後の課題として挙げたい。

第一は、ヴェーダ伝承を保持するブラーマン家系に関する、より広範囲にわたる調査である。今回の調査を通じて、ケーララ州の北端地域や、他州であるアーンドラプラデーシュ州にも、学界未知のヴァードゥーラ家系のあるという情報が得られた。今後はそれらの地域を訪問し、初の学術調査を行いたい。これにより、インドに現存するヴァードゥーラ派家系の全体像が解明される見込みである。

第二は、ヴェーダ祭式の継続的映像収集である。今後も多様な祭式の挙行を意欲的に記録し、これをベースに、文献、映像、画像を多角的に取り入れた「現存ヴェーダ伝承の研

究資料集成」を作っていきたいと考える。また、この取り組みを推進することにより、将来は Visual Dictionary of the Vedic Ritual（映像版ヴェーダ祭式事典）といった画期的な研究成果を生み出すことも可能となると考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① TESHIMA Hideki, Mythological Background of the “Fort of the Gods” Built at the Aśvamedha Described in the Old Śrauta-Sūtras of the Taittirīya School, Journal of Indological Studies, 査読有, No.22, 2011（印刷中）.
② TESHIMA Hideki, Historical Position of the Preliminary Ritual in the *Aśvamedha* Described in the Vādhūla-Śrauta-Sūtra, インド論理学研究, 査読無, No.1, 2010, pp.461-466.
③ TESHIMA Hideki, Chariot Drive in the Aśvamedha: From the Viewpoint of Comparison with the Vājapeya and the Rājasūya, 『印度学仏教学研究』, 査読有, Vol.57, No.3, 2009, pp.1143-1150 (=pp.[1]-[8]).

〔学会発表〕（計３件）

① TESHIMA Hideki, Characteristics of the *Aśvamedha* Described in the Vādhūla-Śrauta-Sūtra, 14th World Sanskrit Conference, 2009 年 9 月 4 日, 京都大学.
② 手嶋英貴, アシュヴァメーダにおける『夜間祭事』の歴史的変遷, 第 15 回インド思想史学会, 2008 年 12 月 20 日, 京大会館.
③ 手嶋英貴, 古代インド王権祭式における共通要素: ヴァージャペーヤ, ラージャスーヤ, アシュヴァメーダの比較から, 第 59 回日本印度学仏教学会学術大会, 2008 年 9 月 4 日, 四国大学.

〔その他〕
ホームページ等
① http://www.kbu.ac.jp/kbu/reseach_ex/h22/pdf/tejima.pdf
② http://www.wilmina.ac.jp/ojc/edu/research/kaken/teshima

６．研究組織
(1)研究代表者
手嶋　英貴（TESHIMA　HIDEKI）
京都文教大学・人間学部・准教授
研究者番号：３０３８８１７８

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
藤井　正人（FUJII　MASATO）
京都大学・人文科学研究所・教授
研究者番号：５０１８３９２６
梶原　三恵子（KAJIHARA　MIEKO）
京都大学・人文科学研究所・助教
研究者番号：００４５６７７４